

0. オリエンテーション、導入・バルト研究から	
1. 自然神学拡張を再考する	4/19
2. キリスト教と政治的なもの	4/26
3. 旧約聖書と契約思想	5/10
4. 契約思想の射程	5/17
5. 王権	5/24
6. ローマ帝国、イエス、パウロ	5/31
7. 国教化と古典的政治神学	6/7
8. 近代世界と政教分離	6/14
9. 国民国家と立憲主義	6/21
10. 社会的なものの拡張	6/28
11. ロールズ	7/5
12. 自由主義と共同体主義	7/12
13. リクール	7/19
(14. 徹底的民主主義	7/26)

#### <前回>

・成績評価：レポートによる。

・受講の注意事項：受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

#### <導入・バルト研究から>

書評：福嶋揚著『カール・バルト 破局のなかの希望』ふねうま舎、2015年。

## 1. 自然神学拡張を再考する

### (1) 伝統的な自然神学理解

1. 芳賀力『神学の小径Ⅲ——創造への問い』（キリスト新聞社、2015年）

「「自然神学」と「自然の神学」とを明確に区別しておかねければならない。」

「自然神学 (a natural theology) とは、イスラエルとイエスにおける歴史的な啓示を抜きにして、したがって聖書的な語りとは無関係に、ただもっぱら人間の理性だけを用いて、自然の中に現れた神について語ろうとする方法である。」

「これに対して自然の神学 (a theology of nature) とは、啓示に基づいて、したがって聖書的な語りを通して自然を読み解き、啓示の光によって洗礼を授けられた理性によって、自然を神の創造の作品として讃美し神学する方法である。」 (p.25-26)

2. ジョン・ポーキングホーン「3 終末論の信頼性：創発的な目的論的なプロセス」(ピーターズ他編『死者の復活——神学的・科学的論考集』日本キリスト教団出版局、2016年、72-88頁)

「もし新しい自然神学がこのメタ科学的議論に貢献するとしたら、それは科学への補完と

して貢献するのであって、科学と衝突してのことではない。これは（自然の巧妙なメカニズムを設計して作り上げた神的な時計職人として神に訴えるウィリアム・ペイリーの訴えのような）古いスタイルの自然神学とは対照をなす。この古いスタイルの自然神学は、眼という光学系の発達のような出来事についての科学的説明に対して、競争相手として姿を現したのである。」(73)

↓

啓示神学と対立する悪しき神学、疑似科学といったイメージをいまだ脱していない。

3. トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990年。

Thomas Forsyth Torrance, *The Ground and Grammer of Theology*,  
University Press of Virginia, 1980.

「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」(121)、「自然神学は動的で実在論的な神学の中に組み込まれている時空構造である」(124)、「神学的科学と自然科学との間には、本来の意味での「自然な」連関が存在するのである」(125)。

4. モルトマン『神学的思考の諸経験——キリスト教神学の道と形』新教出版社。

「I 神学とは何か」の「第六節 自然神学」  
キリスト教神学の前提としての自然神学  
キリスト教神学に目標としての自然神学  
キリスト教神学自体が真の自然神学である  
キリスト教神学の課題としての自然神学

## (2) 自然神学とは何だったのか

5. キリスト教思想の発端における自然神学に遡って考えること。

Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in*

*the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press, 1993  
, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in*  
*Counterpoint*, The University of Michigan Press, 1997

↓

- 1) キリスト教自然神学の原点としての4世紀：ヘレニズムとの出会い
- 2) キリスト教思想史における決定的位置づけ：基本的枠組み
- 3) ギリシャの伝統に依拠しつつそれを批判する
- 4) 哲学的伝統への高い評価・継承、キリスト教神学の運命
- 5) 哲学者の自然神学と神話的寓意的神学との区別  
→ 哲学者の神話批判を異教批判として利用する。伝統への肯定と否定
- 6) 弁証としての自然神学 (Natural theology as Apologetics)  
対論（問いと答え）が成り立つには、その共通の基盤が必要である。  
宇宙論（自然学から形而上学へ）という枠組み。
- 7) 前提としての自然神学 (as Presupposition) ・対異端論争（一神教内部での論争）  
異端を論駁のための諸前提、何が共有され何が異なっているか。
- 8) 異端の体系：誤解された前提・誤った推論

## 6. キリスト教思想の形成の二つの動機・文脈

- ・キリスト教の弁証
- ・キリスト教内の論争：正統と異端
  - コミュニケーション合理性の問いとしての自然神学。

## 7. 中世の自然神学：アンセルムス『プロスロギオン』、トマス『神学大全』

自然神学の議論は、自然理性によって知られる事柄を信すべき事柄として信仰に接続すると同時に、「神から啓示されうるもの」(divinitus revelabilia)を理性によって到達可能な事柄として自然理性に示すことによって、啓示・信仰と理性との間の双方向の運動が生じるべき思惟の場を構成している、それは信仰と無関係に独立して存立できるものではない。

## 8. 自然神学の可能性を論じる際のポイント。

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。議論のコンテクストを構成するその信仰内容から完全に切り離してそれだけで分析されるとき、個々の論証に対して様々な論理的欠陥が指摘されるのは当然である。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えうるといふ点であろう。

③しかし、繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。論証と信仰との関係において、信仰から論証への運動はいわば自然に生じるとしても、論証から信仰への移行の方は、自然神学だけでは説明できない複雑な諸要因の存在を念頭に置く必要がある。つまり、信仰は、知的論証（知識・認識）、意志的決断、感情的関与が相互に絡まりあった一つのプロセスとして理解すべきであるように思われる。

### （3）自然神学を拡張する

#### <問題>

自然神学が、他者とのコミュニケーションの可能性あるいは公共性に関わるものであるならば、それは、「キリスト教思想と自然科学」という問題領域に限定されないはず。

自然科学から、社会科学そして人文科学へ

キリスト教から、諸宗教へ

↓

今後の方針。まず、「キリスト教思想と社会科学」からはじめる。

社会教説：環境と経済、政治

9. Alister E. MacGrath, *Science & Religion. An Introduction*, Blackwell, 1999.

(マクグラス『科学と宗教』教文館)

As we have noted, this question has to be addressed with particular reference to Christianity, on account of the emergence of the natural sciences within the specifically Christian context of western Europe. Nevertheless, the discussion can be broadened out beyond this specific religion. (51)

The importance of being aware of differences between the religions when discussing the theme of "science and religion" can be seen by considering Sigmund Freud's account of the origins of religion in primitive peoples. Freud's argument (which we shall explore at pp.210-5) focuses on God as an idealized father figure. (177)

We have chosen three quite distinct areas of scientific research for this purpose, each of which has religious significance: physics and cosmology, in which we shall focus on some aspects of modern cosmological thinking; biology, in which we shall consider the impact of various forms of Darwinianism on religious thought; and psychology, in which we shall look at various approaches to understanding the origins and significance of religion. (178)

↓

・キリスト教と物理学・宇宙論、キリスト教と生物学・進化論 (→遺伝子工学)

キリスト教と心理学

・心というリアリティ (精神分析学、認知科学、脳神経科学)

↓

社会科学へ？

10. 自然神学を、神学と諸科学とが共有する自然本性に基づくコミュニケーションの問題と考える。神学と対論すべきは自然科学だけではない。

神学の対論は、社会科学、人文科学へと拡張する必要がある。

もっぱら自然科学との対論に止まっていた自然神学の視野を拡張すること。

#### (4) 具体化の試み——キリスト教政治論

11. 拡張の方法論：聖書テキストの解釈から。

古典的な自然神学を参照して。

創造論から自然へ。聖書の創造物語と自然学・宇宙論

12. 科学技術の神学

文明論としての科学技術論

政治、経済、社会、科学技術は、文明論として関連付けられる。

エコロジーと経済 (昨年度) は、その中に位置づけられる。

13. 今年度の前期は、この中から「キリスト教政治論」を取り上げる。